

## 批判原理としての浄土—その理論的基礎

菱木政晴(同朋大学)

キーワード；解放の真宗、自利利他円満、他力回向

### 一、「解放の真宗」と「批判原理としての浄土」

私は、自身の思索と社会的活動、宗教的活動の根拠として「批判原理としての浄土」という概念を提唱してきた<sup>1</sup>。それは、仏教、とりわけ、浄土真宗の信仰が、差別と殺戮にあふれる現実社会の中で、その現実から逃避した主観的な安らぎにとどまるのではなく、現実批判的に対峙する根拠となることを願ったからである。このアイデアは、キリスト教におけるいわゆる「解放の神学」の実践に影響を受けて、「解放の真宗」というようなものが考えられないだろうかという思いから生まれたものであるが、真宗の伝統自体においては、金子大栄の『浄土の観念』（文栄堂、一九二五年）などに示された「観念としての浄土」という概念に一つの示唆を受けている。

### 二、浄土教とはどのようなものか

つぎに、「批判原理としての浄土」という概念が、親鸞や法然の浄土教哲学においてどのように位置づけられるかを明らかにしたい。

仏教は、釈迦が苦悩の解決法に目覚めたということ信じ、自分もまた彼のごとく苦悩の解決者となっていこうと努める者の宗教である。目覚めた者は、なお苦悩のうちにある他者を自ら苦悩の解決者となれるよう導き教化しなければならない。自ら目覚めることを「自利」というに対して、この他者を教化することを「利他」という。この自利利他双方を、浄土という成仏に適した環境に往って（往生して）達成しようという考え方が浄土教である。浄土教においては、自利は自らの浄土往生、利他は自らが浄土から苦悩の現実社会に還帰して、人びとを救う（済度する）ことになる。前者を「往相」、後者を「還相」と称する。

### 三、法然と親鸞の仏教—専修念仏の登場

法然や親鸞の主張は、「専修念仏こそが自利利他円満なる仏教なのだ」ということである。これを一言でいえば他力回向ということである。他力回向の思想は、自利利他円満の仏道の完全なる実現が生身の人間においては事実上不可能であるという深い自覚（機の深信）と、それにもかかわらず、実現の「希望」は私たちのうちに確かにあるという深い自覚（法の深信）によって、生まれたものである。その構造は、「南無阿弥陀仏を唱える」ということにおいて、一方では、弥陀の呼び声に応じて、平和と平等の浄土に往生するという往相

---

<sup>1</sup> 菱木『解放の宗教へ』（緑風出版、一九九八年）、『ただ念仏して』（白澤社、二〇〇九年）、『極楽の人数』（白澤社、二〇一二年）など参照。なお、本発表における三つの節は、それぞれこの三冊の書籍にもとづいている。

のすがたをとると同時に、他方、平和と平等の南無阿弥陀仏の名号を人びとに伝達・伝道するという利他教化・還相のすがたをとることである。南無阿弥陀仏を唱えるということは、平和と平等に対する私たちの希望を純粹化した阿弥陀如来の誓願に賛意を表明することである。そして、それが直ちに、この現実社会の差別と殺戮に対する批判として働くことになる。すなわち、浄土が批判原理として働くのである。